

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「新出多言語資料からみた敦煌の社会」（平成 28 年度第 1 回研究会）

日時：平成 28 年 6 月 4 日（土曜日）午後 14 時より午後 17 時 30 分、5 日（日曜日）午前 10 時より午後 16 時

場所：大阪大学文学部本館 2F 史学科共同研究室

報告者名（所属）

4日

1) 松井太（AA研共同研究員，大阪大学），荒川慎太郎（AA研所員）

「プロジェクト全体の進捗について」

プロジェクト全体の進捗状況を確認した。

2) 松井太（AA研共同研究員，大阪大学）

「ウイグル語銘文からみた仏教巡礼の諸相」

敦煌地域のウイグル語題記銘文の調査成果に基づく昨 2015 年度第 2 回（通算第 5 回）研究会での報告内容を，昨年度の敦煌現地での調査成果や，新疆トウルフアン・内蒙古フフホトなど他地域のウイグル語題記銘文の調査成果に基づいて発展させ，ウイグル人仏教巡礼の期間や巡礼圏，題記銘文にみえる術語や仏教経典との関係などを検討した。

3) 山本明志（AA 研共同研究員，大阪国際大学）

「漢文銘文から見た元代敦煌の巡礼者」

2014 年・2015 年の現地調査に基づく「莫高窟・五箇廟窟・榆林窟 元代漢文題記集録稿（初稿）」を作成し，これに基づき，元代の敦煌における巡礼者の特徴について検討を行った。この検討においては，巡礼者の 1 グループの構成人数，巡礼者の肩書，巡礼者の出身地などに注目した。莫高窟等に残されている元代の巡礼者の題記は，ほとんどが短いものであるが，総合することにより，いくつかの傾向が見出されることが判明した。

4) 佐藤貴保（AA 研共同研究員，盛岡大学）

「莫高窟・榆林窟における西夏時代の漢文題記，供養人像について」

榆林窟第 15・16 窟の漢文題記が，史料の少ない 11 世紀後半の西夏の動向を知るうえで重要な情報を提供していること，莫高窟第 61 窟の供養人像には西夏の王族よりも高貴な人物が発願者として加わっている可能性があることなど，これまでの現地調査での成果と，今後の報告書とりまとめに向けての課題を報告した。

5日

5) 橋堂晃一（AA 研共同研究員，龍谷大学）

「2015 年度敦煌地域ブラーフミー文字銘文調査報告」

本報告では，まず敦煌莫高窟と榆林窟に残るブラーフミー文字題記銘文がウイグル人によって書かれたものであることを確認した。そのうえで 2015 年度の調査によって，アーディティヤセーナなる人物の足跡を追跡し，壁画と関連する題記やブラーフミー文字ウイグル語銘文の存在を確認した。

6) 全員

「成果刊行物編集会議」

成果刊行物の構成，そして具体的な目次案について検討した。

7) 全員

「今後の研究会と調査に関する打ち合わせ」

今後の研究会の日程，ならびに夏季，年末の調査活動に関する打ち合わせを行った。